

平成21年11月19日

「この人に聞く」成熟社会と建築

京都工芸繊維大学名誉教授
財団法人京都伝統建築技術協会理事長
中村 昌生



■京都迎賓館が建設されて5年、日本建築史家であり数寄屋建築の第一人者である中村昌生氏に、改めて建設の経緯やその意義、伝統技能の継承などについてお伺いします。最初に建設の経緯についてご紹介ください。

平成3年の春、和風の迎賓施設が御所に建てられる予定という新聞記事を見て、私はこれで日本もようやく文明開化から脱するのかという印象を持ちました。

その後、私は京都府から依頼され、当時の総理府に設けられた委員会に参加することになります。平成6年の閣議で京都御苑内・京都御所の東・饗宴場跡地に設置が決まり、委員会ではどんな施設が必要か、いろいろ議論されました。そして、建物の様式は現代和風の態様を基調とすることが定められ、平成8年にプロポーザル方式により日建設計が設計者に選定されます。

京都、特に御所の地につくられる現代和風とはどのようなものか。京都には千年の伝統が息づいています。まず京都迎賓館の建設に伝統的技能の活用は欠くことができません。また、近代の建築は洋風建築を導入して発展してきたのが主流です。一方、主流の陰にあって営々と近代に生きてきた木造建築の伝統があり、その中で大工技術も洗練されました。京都にはそのような建築がいくつもありますから、江戸時代以降の「近代和風」の動向をよく見極めて、そこから伝統の真髄をつかんで現代と融合する。それが「現代和風」を創出する方法でした。そして和風の伝統として最も重要なことが「庭屋一如(ていおくいちによ)」、つまり「庭と建物を一体につくる」ということが、自然との共生を理想とする「和」の空間の基本と考えられたのです。そして近代の実業家たちが、富と教養を傾け、名工と力を合わせて営んだ南禅寺付近の山荘では、立派に見せたくない抑制のきいたデザインを建物に展開しました。そこに庭(自然)と一体化できる建物の設計思想があらわれています。

京都迎賓館は、京都1200年の歴史に今なお息づいている伝統の技能を活用し、「庭屋一如」の空間をつくり現代の技術と融合させるという、基本的姿勢で設計、施工され、平成17年4月にオープンしたのです。

■京都迎賓館建設の今日的な建築的意義をお教え下さい。

京都の迎賓館が赤坂と根本的に異なるところは、日本人が日本的な施設、雰囲気の中で、日本人のもてなし方で賓客を接遇する施設であること。日本人の現代のもてなしの規範は揺らいでいますが、海外からの賓客を国の施設でこのように接遇するという作法を示すことは、現代の日本人のもてなしの規範を示すことになり、今後の生活文化の向上にも寄与できるという効果もあります。

今の日本の和の生活には、畳だけでなく椅子の生活も入っています。迎賓館の晚餐室など大きな広間は当然のことながら椅子座、ほかにも椅子座になる部分が多いくらいですが、「座礼+椅子座」にも和の空間を味わっていただけるように、畳の空間だけでなく、洋にあたる椅子座の空間にも和の空間が成り立つように工夫されたところに、設計者のご苦労がありました。

海外からの賓客が日本の空間を体験することによって、日本に対する真の理解が深まる。これが迎賓館という施設の果たすべき使命でもあらうと思います。

■建築における伝統の継承についてどのようにお考えですか

文明開化で導入された西洋の建築は江戸時代の建築とは構造も材料も異なり、長い日本建築の伝統は断絶しました。主流の陰で江戸時代の歴史と繋ぎ、伝統を継承しながら近代化を営々と進めてきたのが、匠たちの仕事です。そうした「近代和風」の建築は、千年の伝統を引き継いでそれなりに近代化を進めてきた成果なのです。京都迎賓館の設計者はそうした近代和風の建築の中から、伝統の精華を汲み上げ、和の設計原理を模索して成果を上げられたわけですが、私は近代和風の精華と現代とを融合させるにはいろいろな方法があると思います。京都迎賓館は現代化の一里塚であり、初めて成し遂げられた成果だと思っています。歴史的にそういう評価がされる時が来ると確信するものです。

建設には多くの伝統技術を駆使する名人が参加されました。彼らは、京都迎賓館の仕事をしたことで自分たちの行ってきた仕事の意味を改めて問い直し、また、自信を持ち、改めて後継者の育成に情熱を燃やしておられます。彼らも伝統を継承しているだけではなく、新し

い素材を使うなど何らかの挑戦をして近代化を進めているのです。伝統とは、掘り下げていけばいくほど創作の泉が湧き上がってくる、そんなものだと思います。単に古いことを継承しているという姿勢では、日本文化の伝統は未来に継承されません。

■和風建築のこれからの課題についてお考えをお願いします。

近代和風、明治、大正、昭和戦前の和風建築は、今では再びつくることのできない木造建築が多いものですから、そのような価値を現代に活かそうという道もあると思います。

しかし、それ以上に千年の伝統とそして構造、素材によって断絶した現代建築の将来とを、どうつなぐか、過去の日本建築の伝統をどう未来につないでいくべきか。木と土と紙の家から脱却して何が伝統として継承できるかを、私たちこれからの建築家は見つけていかなければなりません。現代建築の一世紀余りの躍進や繁栄に酔ってばかりいてはいけないのです。迎賓館はそのような現代建築の抱えている深刻な課題に取り組んだ画期的な建物ではないかと思っているのです。

伝統的な和風建築は、海外でも注目されています。現代建築と長い日本建築の伝統と、どのような繋ぎ方があるかをハードからだけで考えてはなりません。どうしても建築家はハードに走りがちですが、ソフトからハードは生まれる、そんな風に私は考えております。

財団法人京都伝統建築技術協会 <http://www.kyodenken.or.jp/>